



瓦礫の山から歴史を読む

梶原 義実 (考古学)

1年生向けの講義の最初の時間に、「考古学と聞いて思い浮かべることは？」と尋ねるのですが、毎年いちばん多いのは、「発掘」という答えです。

考古学を学問的に定義するとしたら「物質(モノ)資料をもちいて、人類の歴史を復原する学問」といえるかと思えます。ですから、発掘＝考古学ではなく、発掘調査はあくまで考古学の一部、研究資料を獲得する手段でしかないということです。

考古学者が研究の対象とする「モノ」は多種多様で、鏡や銅鐸など、いわゆる「お宝」に近いものを研究する学者もいますが、遺跡からもっとも多く出土するのは、土器、石器、瓦など、一見しただけではその価値がわからない、文字通り「瓦礫」のような遺物です。しかし、この瓦礫の山を詳細に観察し、分析・検討し、そこからどのように歴史を導き出すかが、学問の徒としての考古学者の力量が問われるところであり、また考古学の醍醐味でもあります。

私の専門は古代の瓦で、まさしく「瓦礫」の言葉そのものです。しかし仏教とともに朝鮮半島からもたらされた瓦は、古代においては寺院や宮都という格の高い建物にのみ葺かれる、貴重な建築部材でした。この瓦の軒先につけられた文様にはさまざまな系譜が存在し、当時の仏教の伝播の様相や、寺院や宮都・役所などの造営に関する国家や地方豪族の関与のあり方などを探る手掛かりになります。また瓦生産は当時の基幹産業のひとつであり、それがどのように管理運営されていたかを調べることで、律令期前後の手工業生産のあり方、ひいては律令制の実態の一側面を知る一助となります。

このように、瓦という「モノ」から導き出される歴史が確かに存在しており、私たち考古学者は、それぞれ異なる「モノ」を材料に、歴史の復原に日々取り組んでいます。



古代瓦の実測図作成風景

日本語学というもの

研究室名：日本語学研究室

「日本語学」という言葉を聞いて、皆さんはどのようなことをイメージするでしょうか。「すぐれた文章が書ける」「語彙量を増やす」「敬語が正しく使える」「人を納得させる文章が書ける」といったようなことをイメージする人もいかもしれませんが。結論から言うと、「日本語学」はそのような、いわば「言語運用技術」を高めるために行われるものではありません。「日本語学」とは、日本語を客観的对象と捉え、文法や音声などの規則性、法則性を明らかにしていく学問分野です。

生まれてから今まで、日本語は「あって当然なもの」として生活してきた私たちにとって、学問の対象として捉えづらいかもかもしれません。しかし、「当然使える」はずの日本語に関して、いざ様々な現象



に関して説明しようとする意外にも説明が難しいのです。

例えば、現代語の助動詞「た」の用法について説明してくださいと言われたら、どう答えますか？ 普段日本語を話している人なら迷わず「過去を表す助動詞」と答えると思います。では「あっ、こんなところにあった！」と言う場合の「た」はどうでしょうか？ 探していたものは今もまだその場に「ある」はずですか。では、この「た」とは一体どんな性質をもった助動詞なのでしょう。

「日本語学」は、上にみたような「普段当然使っているはず」の日本語の現象について説明をしていく学問です。もちろん現代語研究だけでなく、伝統的な国語学の分野である古代語研究も盛んに行われています。また、方言の研究、日常会話の研究、さらに手書きのノートを使用した研究など、日本語に関わるあらゆるものが研究対象とされ、様々なアプローチで「日本語」の研究が行われています。

以上のように「日本語学」とは、「日本語」に関わる様々な現象を科学的に捉え、分析し、「意外にもわからない日本語の姿」を明らかにしていく学問です。 [三宅 俊浩 (博士前期2年)]

研究室紹介—File10

古きものの中に新たな真理を見いだすインド文化学

研究室名：インド文化学研究室

私たちの研究は、遠い過去の資料を読み解くという「ことばの探検」のようなものですから、そのための言語の知識が欠かせません。基本として使うのがインドの古典語であるサンスクリット、いわゆる梵語です。この言語の文法に初めて2年生で接します。学習にあたっては私たちの研究室の先生が自作したテキストを使い、丁寧に履修していきます。なので、最初からつまづいてしまうことはありません。サンスクリットは文法体系が高度なものなので、文献をまるでパズルを解くかのような楽しい感覚で読み解いていけます。また基礎となるインド思想史の概要も、先生が巧みに逸話を交えつつ受講者が理解できるまで解説してください。

3年生の中盤になると、幅広いインド文化学の中から自分が本気で取り組みたいことが見えてくるので、その研究に4年次も続けて専念していくこととなります。研究室に朝から晩までこもって研究することもあります。暗いイメージを抱くかと思いますが、そうではありません。所属学生が少ない研究室だけあって、仲間意識が強く先輩も後輩も教授も皆がフレンドリーに明るく楽しく研究しています。

さて、いったい過去のものばかりやって何の役にたつのか、そう思われた方もいるでしょう。しかし、遙か過去のものとは思えないほど精緻な思想には、現代を生きる私たちに対してのメッセージではないかと思うものも多々あります。古きものを研究し、時の流れの中にあっても不変で普遍の「真理」に近づく、それを目指すのが私たちインド文化学研究室です。 [樽迺 信 (学部4年)]



研究室旅行：日間賀島 (2013年10月)

最近の文学部

五月病の季節です

5月の連休、みなさんはいかがお過ごしでしたか？ 私たちが学生の頃（20年くらい前）は、連休明け頃から講義室の学生数が途端に寂しくなり、サークルにバイトにと明け暮れる学生が多かったのですが、最近は連休後もきちんと授業に出て、しっかり講義を聴くマジメな学生が増えてきました。教えるほうとしてはやり甲斐がある反面、すこしくらいなら羽目を外してもいいんだよと思ったりもします。 (K記)